



自然と発展の共生

三浦 あすか

自然豊かな国。もうすぐ着陸する飛行機の中から感じた、マレーシアの第一印象だった。大きな川が流れ、その両側にはたくさんの木々が生い茂っていた。空港に降り立ち、バスに揺られながら、高速道路を走ってゆく。日本では見かけない木々が遠くまで並んでいた。マレーシアの主要産業の一つ、パームオイル。その原料である果房を実らす、アブラヤシ。その深緑色の大きな葉が、大きな弧を描きながら、こちらに向かって垂れていた。

街の中心部に近づくにつれて、外の様子が徐々に変化していく。景色の主役が、木々からビルやマンションに変わった。右を見ても、左を見ても、大きな建物たちが空高くそびえ立っていた。とても発展している国。マレーシアの第二印象は、私の想像をはるかに上回るものだった。

多民族国家のマレーシアでは、宗教も、言語も、生活習慣や文化も異なる人々が、互いに違いを理解し合い、尊重し合いながら共生していた。

「豊かな自然と目覚ましい発展」

対極にあるように思われがちなこの二つも、人々と同じようにお互いの存在を脅かすことなく共生する姿がそこにはあった。それは、これまでに先進国が見せてきた発展の形に学び、マレーシアの人々が得意なスタイルで、今の時代に必要とされる発展の形を見つけ出した結果なのだと私は考える。人や文化だけではない、様々な共生のカタチ。バスの窓から見えたマレーシアの何気ない光景が、私にその存在を教えてくれた。